

『プランB』第20号=2009年4月1日に掲載

私を憶えてくれた吉岡吉典さん

村岡 到

Muraoka Itaru

日本共産党の名誉役員の吉岡吉典さんが三月一日、旅先のソウルで亡くなられた。八〇歳。新聞報道によれば、「三・一独立運動」のシンポジウムで講演した後の夕食会で倒れたという。

私は吉岡さんには三度お会いしただけで、親しいわけではないが、印象的な会話を記憶しているので、追悼したい。

最初にお会いしたのは、というより路上で立ち話ただけであるが、一九八〇年代末だろうと思う。文京区民センターの近く、講道館の向かい側の道ですれ違ったので「失礼ですが、吉岡さんですね」と声をかけ、鞆に入れてあった、私が書いたものを渡して、一言二言話し、読んで下さいと言っただけである。吉岡さんは「はい」と応じたただけであった。鮮明に記憶しているが、何時のことかは憶えていない。

これだけなら、書くに値いしないのだが、二年前にある沖縄関係の集会の二次会の飲み屋で隣に座った方が吉岡さんの秘書を長く務めた人で、話しているうちに、「私はあなたの書いた『不破哲三との対話』（社会評論社、二〇〇三年）を読んだ。こんな本を読んだと吉岡さんに話したら、吉岡さんが『ああ、村岡到を知っているよ。路上で話したことがある』と応じた」と教えてくれた。私のほうが記憶しているのは当然にしても、吉岡さんがこの場面を記憶していて、秘書にそう話したことには非常にビックリした。

それで、吉岡さんに手紙を書き、池袋でお会いした。もう一度、執筆のお願いもあり、ご自宅の近くの駅まで行って話した。

現役を退いていたからでもあろうが、穏やかで開放的な飾らない印象だった。宮本顕治さんについて話が及んだときに、不破哲三氏や上田耕一郎よりも柔軟だったのは宮本さんのほうだったと教えてくれた。彼らは、宮本さんが進んだところまで、実証的に論述していたと説明された。言われてみれば納得できる話であったが、世間では宮本さんのほうがハードと見られている。専門分野にしていた朝鮮問題について、慰安婦の問題は一九六五年の日韓条約締結のころに、自分たちは調べて知っていたが、国会では問題にできず、社会党に資料を渡して、問題にしたこともあったと教えてくれた。「赤旗」編集長時代に、ロッキード事件の政商小佐野賢治の正体を暴くシリーズを連載し、大好評となったのであるが、その第一回目に小佐野は地元では高い評価を受けている、とスタートしたら、直ちに宮本さんに呼ばれて、どういうつもりかと問われたという。彼は悪者の「プラス」面に触れてはならないと思っていたのであろう。さらに、私のことについて、ある時、上田さんから「村岡までは（味方）に入れてもよいのではないか」と相談されたことがあった、と

打ち明けてくれた。「反共分子でなければよいだろう」と答えたというが、この話はそれっきりだったという。何時の頃のことなのか、はっきりはしないが、そういうこともあったのだろう。

お元気であったし、つい先日は「派遣労働者問題と憲法 27 条」を「赤旗」に書いておられた（一月三〇日）ので、いずれまたお話できればと思っていただけに、とても残念である。ライフワークの課題をソウルで講演した直後ということなので、文字通り最後まで闘い抜いての生涯である。ご冥福を心から祈ります。（『プランB』編集長）